

研究集会「下水道事業と地域活動」

II 《総合討論》

1 『プレゼンテーション』

(1) 東京「清瀬下宿ビオトープ公園を育む会」

田中くに子氏・望月基子氏

「下宿ビオトープ公園」（面積 4,300 m²）は、柳瀬川に隣接する清瀬水再生センター内にある。平成 13 年にセンター、地域の自治会、住民、小学校の関係者が参加して「ビオトープを作る会」を結成し議論を積み重ねてきた。設計は、平成 15 年に小学生から応募して得られた、池の中の二つの小島の図案（ブタの鼻）を素案とするデザインを採用した。平成 16 年には、地域の児童、保護者がメトロレンガ敷きや植樹などの整備作業にボランティアで参加した。17 年 3 月には、清瀬市長を始め多くの地域関係者が参加して開園式を行い、小学生手作りの名盤を取り付けた。ビオトープの水源は、地下水と下水処理水が使用され、排水はセンターに戻している。昔からの高木や植栽木、ガマ以外は自然の復元を待ち、従来からあった植物も戻って開園以来 4 年目が経過している。今では、ミヤマツバタなど多くの植物、ギンヤシロなどトンボや蝶、ヘビ、カエル、カササギなども見ることができる。魚は自然に戻るのを待てないので、柳瀬川の魚類調査を行い、メダカ、モツゴ、カササギなどを子供達と一緒に放流した。今では多くの小魚を見ることが出来、鳥達も沢山飛来している。17 年 9 月には「育む会」を立ち上げ、ボランティア活動としてセンター職員 2 名、市職員 2 名、ボランティア 8 名が参加して、セイタカアワダチ草など帰化植物の除草作業を年 3 回実施している。夏にはアオトビが池を覆うので除去に一苦労するが、センター長や他の人も良く協力してくれる。19 年秋には選定種をまとめメトロレンガの重しをつけて漁礁作りを行った。植物調査も行っているが、生息種は年々増加し 19 年 5 月には 145 種を確認している。環境教育活動としては、4 年生の総合学習の一環として、ビオトープの生物などの環境学習を行っている。昨年の 4 年生は、春は植物観察とセイタカアワダチ草など帰化植物の除去を行い、夏にはザリガニとりや長く伸びたツルの長さを測りそのツルで縄跳びもした。秋はトンボや蝶など多くの昆虫観察を行い、冬にはミヤマツバタやメダカやカササギの幼虫を見つけたりした。子供達はとても満足しているようだった。2 月には観察成果の発表会も行ったが、私達はその姿を見届け、このビオトープ公園が子供達の学習にとっても役立っていることを実感した。昔から生息していた生物が戻った貴重な場所、また環境学習の場所として、私達は、この公園を守り、子供達の学習にも協力できる会として、今後とも努力していきたい。

(2) 川崎「森とせせらぎネットワーク」

河野健三氏

川崎市は 1970 年代からの急激な都市化に伴い川が汚れ始めた。中原区と高津区の境を流れる江川も汚れが目立ち氾濫を防ぐためもあって、市は 1985 年、地下 45m に直径 8.5m の雨水貯留管を通し生活污水は別ルートから処理場に廻す、そしてポンプ処理した高度処理水を江川に流す計画を発表した。この貯留管工事が進んでいく中で、上の水路を使ったプロムナード計画も出来あがっていくが、私達は、1990 年あたりから活動に乗り出し、江川の上部をどう使うかなどを話し合う行政と市民との協働作業となった。「水に親しむ」、「子供が遊べる」などの視点で 8 つのゾーン設定をし、4 年間の工事を経て 2003 年に完成した。貯留管の工事から 18 年間に及ぶ住民の活動

があったことになるが、当初言われていた「生物は住めない」、「取り扱いには注意が必要」など水質の問題は解決していた。子供達はすでに水に入っていたし、放流された鯉、グッピーなどを餌にしてカガモ、コサギなどの鳥達、川鶉やゴイギまでくるようになった。と同時に、植栽は傷み、土の減りや草花が枯れたりするので、修復・管理保全是地域でやるようになった。多いところで月に2~3回は環境保全活動をやっている。「ネットニュース」も生まれ、2006年には「森とせせらぎのネットワーク」という沿線10町会に小中学校、高校まで含めた連絡組織ができた。2007年11月にはイベント「せせらぎ祭り」を行ったところ雨天にも拘わらず4,500人もの参加者があった。2回目は今年の11月9日に行う予定であるが、このようなイベントを通して、この水に繋がれた地域がどのような地域づくりをするのか模索されていくことになる。今後の課題であるが、水に触れることは当たり前前の感覚になっているので、子供達がザリガニやグッピーを取りに入ると汚れたり土間が痛むので、保全することも課題。新住民が増えこの方々や商店街への情報伝達・連絡体制も課題。鯉ヘルペスの問題もある。年3回水路の清掃時、水を上げるので鯉が低い狭いところに過重に集まる。結果、傷つきあい水が流れてきた時には、病気をもった鯉が沢山泳いでいる状態で一度に浮いてしまう。清掃をしないで済む方法がないか探っているが、このようなことの情報を含め、他の市民団体や行政からも有用な情報を貰って、水そのものを生かすような地域づくりをしていきたい。

2 『討 論』

(コーディネータ) 今回は、一般市民、NPO活動の方にも出席頂く新しい試みで、「鶴見川ネットワーク」「NPO法人荒川学会」の方にも参加頂いた。急激な都市化の過程で失われた水辺をどう作り直すか先進的4事例が報告された。これまでの所で質問、意見等あれば。

(土屋氏) 当市で進めている中溝水路では、ユスリカ発生の問題で住民から反対され頓挫している。川崎市では、ユスリカ発生について議論がなかったのか。

(河野氏) 鯉ヘルペスの発生以外に、ユスリカの話もあった。ユスリカは2月から3月と早い時期から発生しているが、周囲に農地が無くそれ以上には発生していない。歩いている人は手で払いのけており、今のところ大した問題にはなっていない。

(コーディネータ) 鯉やザリガニを放す、入ってはいけないのに入る、やはりどういう使い方があるのか、決まり・ルールが必要。そこに皆が関りながら合意形成ができていくと思う。

(国交省の方) 行政は、市民とのつながりを考えた場合きっかけがない。逆に市民は行政のことが良く解らないと思う。行政のスタンスはどうあるべきかヒントでもあれば。

(河野氏) その時時の市職員の対応が非常に良かったので乗り切れた。遊歩道の設計でも、我われのアイデアを採用し気持ちを汲んで頂いた。せせらぎの水質検査も即座にやって頂いた。情報をきちっと伝え市民と行政が気軽にキャッチボールができる関係が一番だ。

(田中氏) 最初は、一般市民で関心のある人が集まりコンサルトも交え議論したが纏まらず、地域の自然を守る会や小学校、教育委員会などから1~2名参加して議論するようになるとスムーズにできた。しかし、やりたいけど参加できないという一部の不満はあった。

(服部氏) 「市政だより」などで市が何かやるというような時、ダメ元で何でも相談してみる積

極的なアプローチが重要である。

(コーディネータ) 「熱心な行政対応」などの話があったが、この動きを全国に進めようとした時、下水道は市民に見えているのか、下水道で何ができるのかが見えていないのではないかと、どうしたら一緒に取り組み持続的発展が可能か、この辺がポイント。川では、河川管理者と NPO が、同じような議論をかなり前に経験し乗り越えてきたと思う。

(荒川学会の方) 処理場などのイベントに行っても、自由に入って色々なことをしてよい雰囲気が見えない。ザリガニは、夜間の行動範囲が 200m もあり人間の仕業と断定できず、特定外来種だから皆でザリガニ捕りをしようというのも難しく、どうしたらよいか悩んでいる。

(コーディネータ) 下水道が見えない、閉鎖的、だからこそ下水道の持つ土地、水辺、再生水などがどういう風に見えるのかが見えていない、そんな感じがする。

(鶴見川ネットの方) どうしたら行政と一緒に活動できるか、最後は組織ではなく人。町田のビオトープは休日返上で行政の人が来る。申し訳ないと思いながらそのお陰で顔の繋がりが出来る。ザリガニの話では、私達は捕ったザリガニをサビの餌としている。池の浮きマスに入れておくと、鳥が集まりサビが食べてくれる。子供達には次の命に繋がっていくんだよと説明している。

(コーディネータ) 河川は、土日とか夜、良く市民と活動を共にしているが下水道は少ない。下水道が、最終的に水循環、水辺再生に貢献していくには、一歩踏み込む必要があると思う。

(清瀬水再生センターの方) 最近清瀬では良くイベントを行い、3/27 のお花見の時には 380 名の参加があった。イベント時、1 時間の見学コースで施設見学し「育む会」に必ずビオトープの説明をして貰う。リピーターが多くなり施設公開などの時は、必ずリピーターに発送するようにして PR に成功している。休日出勤などは難しい課題があるが、できるだけ対応していきたい。

(コーディネータ) 土日での行政の取り組み方、職員の意識などについて、何か意見を。

(土屋氏) 5/27 土日のイベントは、市民と一緒にやるので朝から夕方まで個人的にいきたい。局の中に「ゆらゆら水辺検討会」があり、川の掃除に行ったりしているのでそのような活動を広げたい。土日についても、住民からの要請があれば行くようにしている。

(森山氏) 一年中小学生の見学会がある。また、「水の日」のイベントは、土日に行うので振替えて出る。ボランティアで出る場合もある。市内唯一の水源地の桜祭りでは、浄化センターからプロムナードを歩く企画を組み、夜の 8 時まで下水道施設をアピールしている。

(21 世紀水倶楽部理事) 子供が溺れる事故では、河川では自然物として行政責任が無いのに対し、下水道では人工物の概念から管理責任が問われる。裁判事例もある。普通下水道施設は危険でそれなりの苦勞をしている面がある。ただ下水道のビオトープなどは、自然物として認識してもらおうよう世論を喚起する必要がある。

(コーディネータ) 公園も管理責任を厳しく問われる時代。水質の問題と同様、是非乗り越えていかなければならない問題。責任分担などを含め大いに議論を進める必要がある。

(下水道事業団の方) 地元環境団体で土日、河川調査等をやっている。ボランティアでは最初少数だったのが段々輪が広がって行くことが多い。そんな時のきっかけ等についてご教示願いたい。

(河野氏) 話し合いは 10 町内会となり相当な意見の言い合いとなるが、問題提起し、フリーディス

アクションする。「せせらぎ祭」が生まれたのもこの様な中からとを感じる。困ることは完成後、水路は下水道局、植栽は環境局と複数になり戸惑う面がある。藻の問題では、危険性より水の美化活動をしたが受け止めて頂いてない感じがする。

(田中氏) 藻による水路の汚れは、夏、池が藻の繁殖して酸欠にならないかセンターへ相談し、除去する受けバットを設置したり、シルバーセンターの方に熊手で清掃していただいている。

(コーディネータ) 江川のせせらぎ水路は、完成後地域の宝となり、受け止める市では今後は下水だけでは対応できなくなってきたと言える。いい意味で発展したといえると思うが。

(川崎市の方) 管理者の立場からはメンテナンスフリーがふさわしい。延長 2.4km、流量約 10000m³/日の管理を職員 1 名が行っているが、これからは、市民の方にどういう形で協力をお願いするか、窓口の問題も含め考えていく必要があると思う。

(コーディネータ) 市民と行政が対等で話し合う協議の場をどう形作るかは、持続性、発展性を保っていく最大のポイントだと思う。

(鶴見川ネットの方) 持続性の点で市民の側から言うと愛、愛着、愛情に尽きる。また、「子供達が好きになってくれるか」そのため「大人達がどうきっかけ作りをできるか」だと思う。

(荒川学会の方) 持続性では、皆が見る機会や発表する場作りが重要。川の日ワークショップの関東大会も実施し、川に限らず水辺の活動を発表しあって皆が元気になる活動をしている。

(司会) それぞれの水辺をどうしたら良いのか、夢を総括していただきたい。

(土屋氏) 財政事情が厳しいが市長の理解を得て 2 つの事業を進める予定。現在、維持管理に経費がかからないよう、住民団体へ補助金を交付する新システムを考えている。

(服部氏) 水辺は人間だけのものではなく、心を広くして人の心をかなえる場所。温暖化防止にも役立つ生態系も含めた水辺として維持管理していければいいと思う

(森山氏) 1 万 m²プロムナードの水路に処理水を流そうとしたが、基準が変わり膨大な費用がかかる。財政事情の悪化もあって、あと 1 箇所のみオトープをどうするかである。

(田中氏) もう少し人が来てくれたらと思う。しかし、ヨモギなど摘ましてくださいと言ってくる人も多く、一層親しまれる場に、環境学習の場としても相応しいものにしたい。

(望月氏) センターや市の方と一緒に汗をかく事でうまくいく。発展の契機、新しい環境学習の場に結びついていく。管理作業や環境学習も定着してきたので持続し続けることが夢。

(河野氏) 22 万人、23 万人の行政区の間にあるせせらぎ水路が皆のものになるのが夢。せせらぎ祭りのコンセプト「子供の未来」「地域ふれあい」「水と緑のふるさと作り」が、私達が失ってきたふるさとづくり、緑・水・人に対する愛着に結びついていくと信じる。

(司会) 論点を整理すると、

①下水道が見えているか、②下水道で何ができるのか、③どうしたら一緒に取り組めるか、どうしたら続けられるか、これからどうするか。キーワードは、

『情報発信』、「下水道は何をしてきたのか」、「どんな役割を持っているのか」。

『潜在能力』、「下水道で何ができるのか」「何を見せるのか」。

『場の提供』、「水辺づくりの場」、「協議する場」、「活動の場」で、処理場を NPO 活動の

拠点にするのも場の提供。下水道の持つ水辺、水路、水は、
『地域資源』といえる、もっと地域づくりに生かして、
『多くの関係者』住民、NPO、行政をどう束ねていくのか。
『目標の共有と合意形成』、どういう環境を持つ水辺として作るのか、触れるのか見るだけなのか、それによって水質も違うしお金も違う、お金は誰が出すのか。
『協働』、計画から管理段階まで。当然
『役割分担と連携』、住民にも行政にも「責任」が出てくる、使い方の「ルール」も責任に含まれる、使い方、汚さないためのルール。
『安全』も忘れてはいけない、落ちるとい物理的な安全、触れることの安全。
『面白さ』、面白ければ子供が寄ってくる、夢ができる。
『情報交換』、関わりのある人達の意見交換、すでにある所に飛び込んで発信し、情報交換する。
それにより更に進化発展する。纏めとしてこのようなことになると思うが、本日の熱心な議論を通じて、改めて下水道の持つ力、水辺の持っている力を確認できたと思う